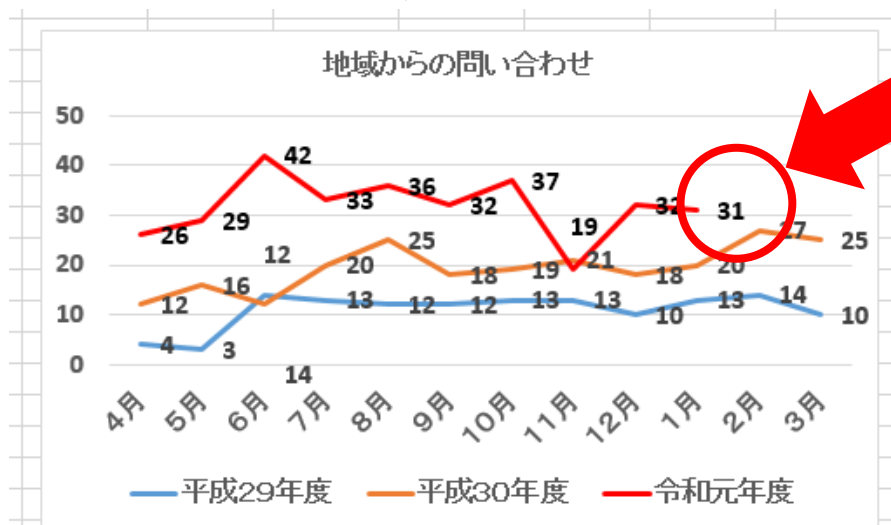


～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

令和2年2月の問い合わせ状況の報告

いつもお世話になりありがとうございます。令和2年2月に地域の皆様から問い合わせ頂いた状況の報告です。問い合わせ元ですが、地域の先生方やケアマネジャーの方、他病院のソーシャルワーカーの方に加え、ご家族からの問い合わせが6件ありました。引き続き、地域包括ケア病棟“彩り”をよろしく願います。（地域医療連携室 室長 南出 弦）



がん地域医療連携力向上研修会開催の報告

～顔の見える関係作りのために～



当院は、2015年から「地域がん診療病院」となり、地域のがん診療の中核病院としてがん診療の向上、がん患者の支援体制構築に努力してまいりました。また、京都府では地域のがん拠点病院と地域の医療機関が連携してがん患者に対応できるように、医師同士の顔の見える関係づくり、がん診療における情報の

共有、課題検討の実施が推進されています。そのような背景もあり、令和2年2月20日（木）、地域のがん診療に携わる医師同士による意見交換会を開催させて頂き、相楽医師会からは山口泰司会長（山口医院 院長）、伊左治友子先生（伊左治医院 院長）、奥和美先生（おく内科医院 院長）、京都府山城南保健所からは本永保健師がご参加下さいました。当院からは、小池がん診療部長、北岡産婦人科部長、田邊消化器内科副部長、高村泌尿器科医師、南出地域医療連携室長、中嶋が出席

（裏面に続く）

しました。

研修会でははじめに、私からがん相談支援センターの活動報告をさせて頂いた後、小池がん診療部長から紹介頂いた患者さんの症例報告を、電子カルテで採血結果や画像などを閲覧しながら行いました。そして、意見交換です。意見交換の中では、医療資源が常備され、専門分野に特化している病院と違い、かかりつけ医は限られた医療資源の中で幅広く老若男女問わず対応する必要があることや、医院が一つしかない相楽東部地域はどんな症例でも受け入れる覚悟を持って診療にあたる必要があることなど、その苦悩をうかがうことができました。また、通院が困難になった患者さんの治療継続を地域の先生方への引継ぎ方などの話もあり、今後の病診連携に役立つのではないかと感じました。

今後も、この「がん地域医療連携力向上研修会」を継続したいと考えています。今後とも、ご支援、ご協力をお願い致します。(地域医療連携室 主任 中嶋 庸介)

令和元年度第2回 認知症疾患医療連携協議会を開催しました。

～ 意思決定支援について考える ～



2月17日(月)、地域の認知症支援に携わる専門職の方々をお迎えして、標記会議を開催いたしました。今回は、京都府こころのケアセンター若年性認知症支援コーディネーターの木村葉子氏から「若年性認知症支援コーディネーターの活動と意思決定支援」をテーマに話題を提供して頂きました。同センターは、若年性認知症の本人・家族および本人を取り巻くすべての関係者の相談窓口となり、連携体制の構築・普及啓発活動を担っています。

木村氏からは、若年性認知症患者本人の「働きたい気持ち」を尊重し、サービスを利用しながら働ける場所をコーディネートした事例を紹介頂きました。若年性認知症の人の就労支援は、就労した時が最も能力が高く、徐々に病気の進行・意向の変化が予想されます。そのため、本人・家族が一生懸命生きておられる「今」を大切に、支援者側が持っている「将来」の情報を提供しながら、伴走してゆくことが求められるそうです。これは、年代や病気の種類を問わず、ケアする人に求められる基本的な姿勢だと思いました。フロアからは、「本人に配慮しながら病気の道筋を示し、意思を引き出し家族にも伝えて決めてもらう」「本人より、家族の意思が反映されやすい。本人と腹の関係になると本音が見えてくる」「家族の味方でありつつ、本人に寄り添う」「一人暮らしの方には、早めに意向(望む暮らし)を聞いておく」「意思を汲み取れるような工夫を凝らす(環境を整える)」など、様々な意見が出されました。私は、かつて恩師から言われた「迷った時は、(最終的には)人間的であれ」という言葉を思い出しました。むずかしいテーマを話し合う事で、みなさんの人柄が垣間見えたように思いました。

(地域医療連携室 臨床心理士 谷川 誠司)